

聖枝祭 代式祈祷

— 前半 —

輔祭 主イイスス ハリストス神の子よ、爾が至浄の母と諸聖人との祈祷によりて、我等を憐れみ
給え。
(詠) アミン

【大連禱】



輔祭 我等安和にして主に禱らん、 (詠) 主憐めよ

輔祭 上より降る安和と我等が ^{たましい すくい} 靈の救の為に主に禱らん、 (詠) 主憐めよ

輔祭 全世界の安和、神の聖なる諸教會の堅立、及び衆人の合一の為に主に禱らん

輔祭 この聖堂、及び信と慎みと神を畏るる心とを以て、ここに来たる者の為に主に禱らん、

輔祭 教會を司る尊貴なる我等の東京の大主教及び全日本の府主教ダニイル、司祭の尊品、ハリストス
に因る輔祭職、悉くの教衆、及び衆人の為に主に禱らん、

輔祭 我が國の天皇、及び國を司る者の為に主に禱らん。

輔祭 ^{こ まち およそ まち} 此の都邑と ^{こ うち お} 凡の都邑と地方の為、及び信を以て此の中に居る者の為に主に禱らん、

輔祭 氣候順和、五穀豊穰、天下泰平の為に主に禱らん、

輔祭 航海する者、旅行する者、病を患ふる者、^{うれ} 艱難に遭ふ者、^{もの} 虜となりし者、^{かんなん} 及び彼等の救の為に主に
禱らん、

輔祭 我等 ^{もろもろ} 諸の^{うれい} 憂愁と^{いかり} 忿怒と^{あやうき} 危難とを免るるが為に主に禱らん、

輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を ^{たす} 佑け救ひ憐み護れよ、

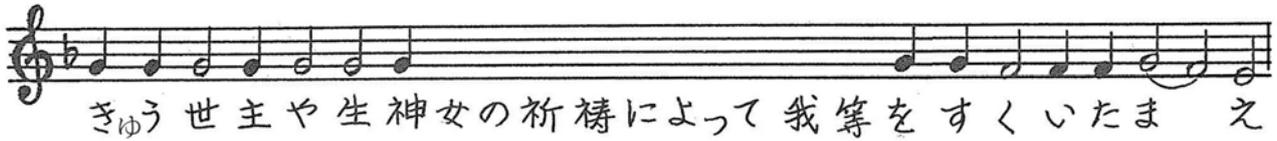
輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光榮の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶し
て、我等己の身及び互に各の身を以て、並に悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、

(詠) 主爾に

輔祭 主イイスス ハリストス神の子よ、爾が至浄の母と諸聖人との祈祷によりて、我等を憐れみ
給え。
(詠) アミン

第1 アンティフォン 第114 聖詠

誦経（附唱）救世主よ、生神女の祈禱に因りて我等を救ひ給へ。



誦経（第1句）我喜ぶ、主の我が声、我が祈りを聴きしに因る。

♪ 救世主よ…（同上繰り返す）

誦経（第2句）彼は その耳を 我に ^{かたむ}傾けたり、故に我在世の日に彼を呼ばん。

♪ 救世主よ…

誦経（第3句）死の病は我をかこみ、地獄の苦しみは我に ^{のぞ}臨み、

♪ 救世主よ…

誦経（第4句）我 ^{しんく}辛苦 ^{かんなん}艱難に ^a遭へり、その時 我 主の名を呼べり。

♪ 救世主よ…

誦経 光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン

♪ 救世主よ…

【小連禱】

輔祭 我等またまた安和にして主に ^{いの}禱らん、 **（詠）主憐めよ**

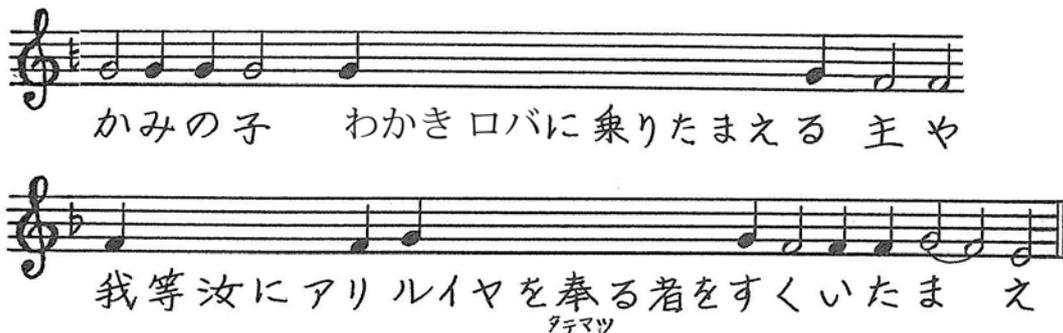
輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を ^{たす}助け救い憐み護れよ、

輔祭 ^{しせいしけつ}至聖至潔にして至りて讚美たる我等の光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等 ^{おのれ}己の身及び互に各の身を以て、ならび ^{ことごと}に ^{いのち}悉くの我等の生命を以て、ハリストス神に委託せん、 **（詠）主爾に**

輔祭 主イイスス ハリストス神の子よ、爾が至浄の母と諸聖人との祈禱によりて、我等を憐れみ給え。 **（詠）アミン**

第2 アンティフォン 115 聖詠

誦経（附唱）若きロバに乗り給いし神の子よ、我等爾に「アリルイヤ」を歌ふ者を救ひ給へ。



誦經 (第1句) 我信ず、故に言へり、我はなはだ傷めり。

♪ 神の子、若きロバに乗り給いし… (同上繰り返す)

誦經 (第2句) 我 何を以て / 主の我に施しし悉くの恩に報いん。

♪ 神の子、若きロバに乗り給いし…

誦經 (第3句) 我 救いの爵しやくを受けて、主の名をよばん。

♪ 神の子、若きロバに乗り給いし…

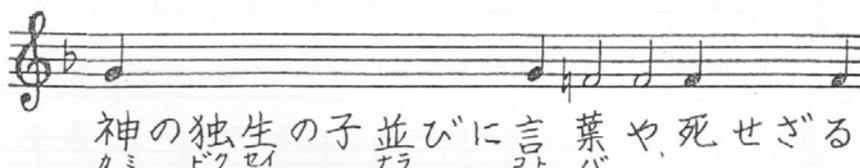
誦經 (第4句) 我が誓いを主に、その衆民しゅうみんの前に償つぐのわん。

♪ 神の子、若きロバに乗り給いし…

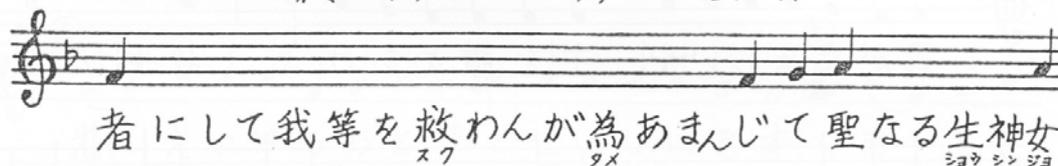
(続けて)



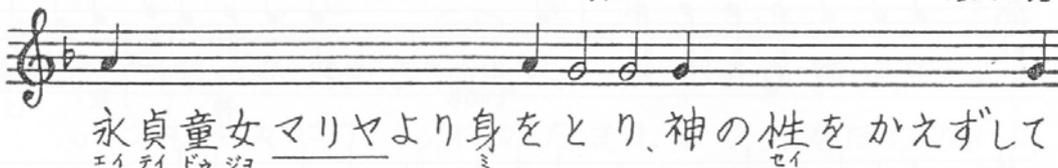
光栄は 父と子と聖神に帰す) いまも 何時も 世世に アミン



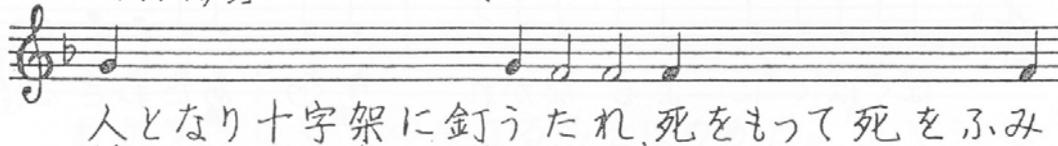
神の独生の子並びに言葉や死せざる



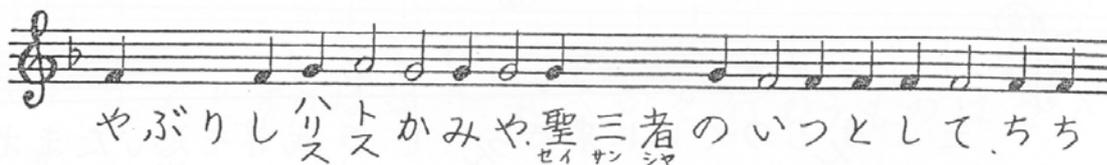
者にして我等を救わんが為あまじて聖なる生神女



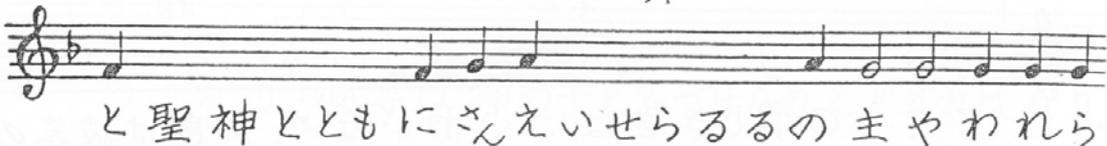
永貞童女マリヤより身を取り、神の性をかえずして



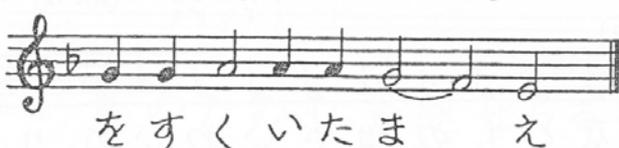
人となり十字架に釘うたれ、死をもって死をふみ



やぶりしハリスかみや聖三者のいつとして、ちち



と聖神とともにさへいせらるるの主やわれら



をすくいたま え

【小連禱】

輔祭 我等またまた安和にして主に^{いの}禱らん、 (詠) 主憐めよ
 輔祭 神よ、爾の恩寵を以て、我等を^{たす}助け救い憐み護れよ、
 輔祭 至聖至潔にして至りて讚美たる我等の^{しせいしけつ}光栄の女宰・生神女・永貞童女マリヤと、諸聖人とを記憶して、我等^{おのれ}己の身及び互に各の身を以て、ならびに^{ことごと}悉くの我等の^{いのち}生命を以て、ハリストス神に委託せん、 (詠) 主爾に
 輔祭 主イイスス ハリストス神の子よ、爾が至浄の母と諸聖人との祈祷によりて、我等を憐れみ給え。 (詠) アミン

主あわれめよ主あわれめよ 主なんじに

アミン

【第3 アンティフォン】

ハリス^スかみや^ツ汝^ニいまだ^カ苦し^ムみ^ヲを受け^テざる^ニさきに

万人^{マンニン}の復活^{フクカツ}を証^{シヨウ}せんがためにラザリ^ヲを死より復活

せしめたりわれらも童子^{ドウジ}のごとく勝利^{シヨウリ}の

しるしをもちてなんじ死に勝つ主に呼ぶ^イ至と

たかきにオサナ^{ヨク}主の名に依て来たる者は崇^{アガ}めほめらる

輔祭 叡智 謹みて立て

来たれ^{リス}のま えに^ス伏しおが^スまん かみの子
 若き^スロバにの りたま^スえる主や^スなんじに^スア^スリル^スイヤ
 をたて^スまつるもの をすく^スいたま え

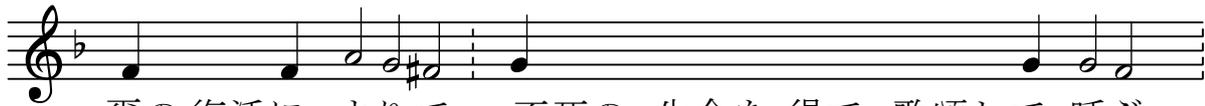
トロパリ 1

ハリス^スかみや^ス汝^スいまだ^ス苦し^スみ^スを受け^スざる^スさきに
 万人^スの復活^スを証^スせんが^スために^スラザ^スリ^スを死^スより^ス復活^ス
 せしめ^スたりわれ^スらも^ス童子^スのご^スとく^ス勝利^スの^ス
 しるし^スをもち^スてなん^スじ死^スに勝^スつ^ス主^スに呼^スぶ^ス至^スと
 たか^スきに^スオサ^スナ^ス主^スの名^スに依^スて^ス来^スたる^ス者^スは崇^スめ^スほめ^スらる

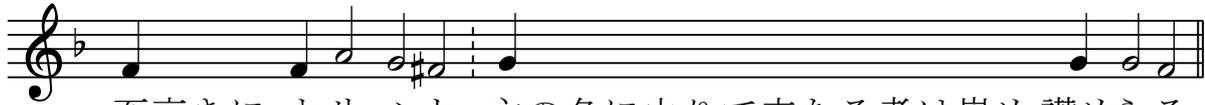
♪ 光栄は父と子と聖神に帰す

トロパリ 2

トロパリ4調
 ハリス^ストス^ス 我^スが^スか^スみ^スよ 我^ス等^スは洗^スを^ス以^スて^ス爾^スと^スと^スも^スに^ス葬^スら^スれ^スて



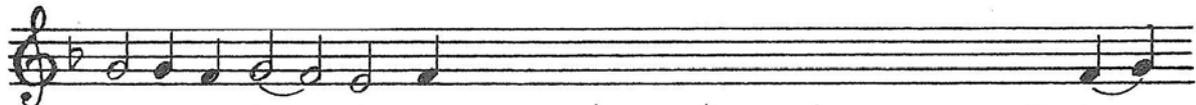
爾の復活に よりて 不死の 生命を得て 歌頌して 呼ぶ



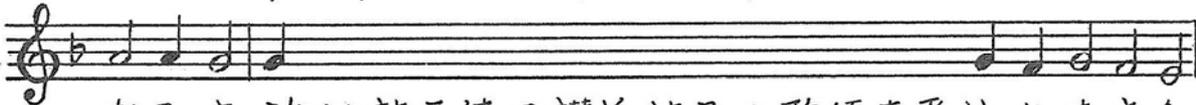
至高きに オサーナ 主の名に由りて来たる者は崇め 讃めらる

♪今も何時も世々にアミン

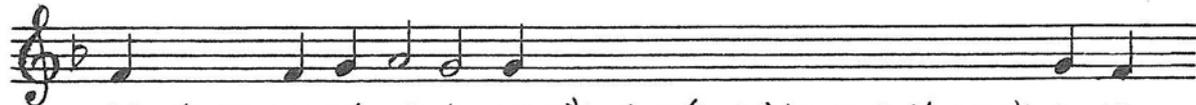
コンダク



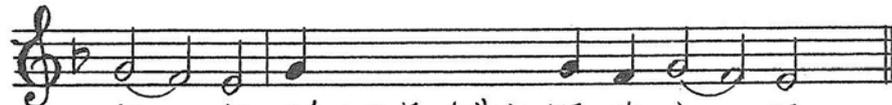
天には宝 座 地には若き驢 に乗せらるる分ト
ホツ ガ ワカ ウサギウマ ノ ス ス



かみよ 汝は諸天使の讚美 諸子の歌頌を受けたまえり
ショ テン シ サン ビ ショ シ カ ショウ ヲ

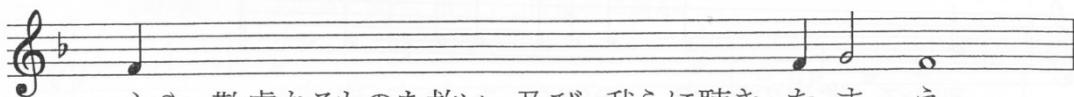


彼等汝に呼べり アダムを呼び起さん為に来たる
ヨ オヨ



主 よ 汝はあがめほめらる

輔祭 主や、敬虔なる者を救い、及び我等に聴き給え



主や、敬虔なるものを救い、及び、我らに聴き たま え

【聖なる神】

アミン 聖なる神 聖なる勇毅 聖なる常生の者や、
セイ カミ セイ ユウキ セイ ジョウセイ モノ

我等をあわれめよ
ワレラ

光栄は父と子と聖神に帰す、今も何時も世々にアミン
コウエイ チチ コ セイシン キ イマ イツ セヨ ヨ

聖なる常生の者や、 我等をあわれめよ
セイ ジョウセイ モノ ワレラ

聖なる神 聖なる勇毅 聖なる常生の者や、 われらを
セイ カミ セイ ユウキ セイ ジョウセイ モノ

あわれめよ

ポロキメン、第四調、

輔祭 叡智

誦経 ポロキメン

主の名によりて来たる者は崇め讃めらる、主は神なり、我等を照せり。

誦経 (句) 主を讃榮せよ、蓋 彼は仁慈にして、その憐みは世世にあればなり。

♪ (繰り返す)

誦経 主の名によりて来たる者は崇め讃めらる、

♪ 主は神なり、我等を照らせり

【使徒経】

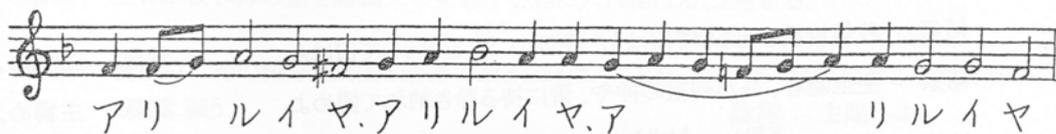
輔祭 叡智、聖使徒パウエルがフィリピンに達する書の読み

輔祭 謹みて聴くべし

(フィリッピ4:4-19)

けいてい 兄弟よ、爾等、つね あ よろこ また い よろこ おんじゆう しゆうじん
 知らるべし。主は近し。何事をも おもんばか なか すなわち およそ こと おい きとう きがん
 かつ もつ もと ところ つ しか へいあん およそ こ
 且、感謝を以て、爾等の求むる所を神に告げよ。然らば、神の平安、凡の知識に超
 る者は、ハリストス・イイスに於て、おい ころ おもい これ きわ
 わ けいてい およ まこと およ とうと およ ぎ およ いきぎよ およ
 に、我が兄弟よ、凡そ眞なること、凡そ尊きこと、凡そ義なること、凡そ潔きこと、凡
 そ愛すべきこと、およ しょう およ いか とく いか ほまれ これ おも
 爾等が我に学びし所、受けし所、聞きし所、見し所は、之を行へ。然らば、へいあん
 の神は、爾等と偕に居らん。

誦経 アリルイヤ、アリルイヤ、アリルイヤ



誦経 (句) 新なる歌を主に歌へ、蓋彼は奇跡を行へり。

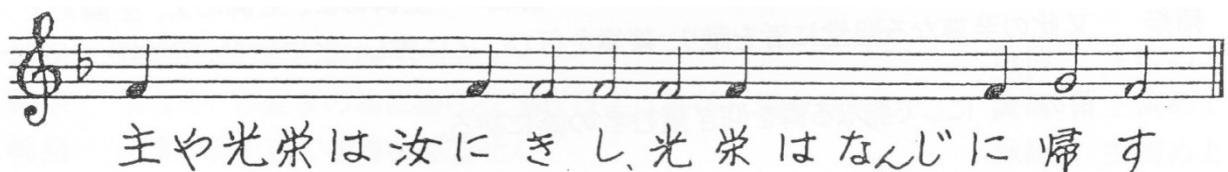
♪ **アリルイヤ** (同上繰り返す)

誦経 (句) 凡そ地の極は我が神の救を見たり。

♪ **アリルイヤ** (同上繰り返す)

輔祭 叡智、謹みて立て、聖福音経を聴くべし

輔祭 イオアン伝による聖福音経の読み



パスハ むいか きた すなわち かつ
逾越節の前、六日、イイスス、ワiffアニヤに來れり。即、ラザリ、曾て、死し
て、彼が死より復活せしめし者の居る所なり。彼處に於て、彼の爲に、晚餐を設け
たり。 マルフア、きょうじ とも せきざ ひとり
供事し、ラザリは、彼と偕に席坐せし者の一たり。マリヤは、
じゅんりょう あたいとうと においあぶら いっきん と ぬ おのれ
純良なる「ナルド」の価貴き香膏一斤を執りて、イイススの足に膏り、己の
かみのけ もつ そのあし のご いえ においあぶら かおり み そのもんと
髪を以て、其足を拭へり。家は、香膏の香気に満たされたり。其門徒の
ひとり すなわち う いわ
一、シモンの子、イウダ『イスカリオト』、即、彼を賣らんとする者、曰く、
なん こ においあぶら ぎんさんびやく う まず もの ほどこ
『何ぞ、此の香膏を銀三百に售りて、貧しき者に施さざりし』。

これ い まず おもんばか たため あら すなわち ぬすびと よ
彼の、之を言ひしは、貧しき者を慮る爲に非ず、即、竊者たるに因りて
なり。彼は、かねばこ そのうち おさ たずさ
金匣を持ち、其内に蔵めたる者を攜へたり。

い
イイスス曰へり、

お わ ほうむり たため これ たくわ けだし まず
「彼を捨て。彼は、我が葬の日の爲に、此を貯へたり。蓋、貧しき者は、常
にも われ とも
に爾等と偕にす。我は、常に爾等と偕にするにあらず」。

おお たみ かしこ あ し ひとり ため
イウデヤの衆くの民は、彼の彼處に在るを知りて、獨イイススの爲のみならず、
すなわち そのし たため きた しさいしよちよう
乃、其死より復活せしめしラザリをも見ん爲に來れり。司祭諸長は、ラザリをも殺
はか けだし ゆえ よ おお ゆ
さんことを謀りたり。蓋、彼の故に因りて、多くのイウデヤ人、往きて、イイススを信

